

1 主題構成表

主題名 「困難を乗り越えて」 (小学校・高学年)

資料名 「灯を持つ乙女—山本 芳翠」

<p>■ 内容項目 1-(2) より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。</p>	<p>■ 内容項目から見た児童の実態 (意識) ・よりよい姿を目指して、目標を立てていこうと考えている。 ・思うように結果が出ないと、すぐに助けを求めたりあきらめたりして「自分にはできない」と決めつけてしまうことが多い。 ・目標達成に向けて、着実に前進していこうとする意識に弱さがみられる。 (要因) ・目に見える結果の善し悪しだけで努力の全ての評価をしてしまう。 ・高い目標に向かって粘り強く努力していく経験が少なく、達成感を十分に味わっていない。</p>	<p>■ 資料の分析 ・本資料は、日本一の絵かきになることを目指し、後に「洋画の父」とまで言われるようになった山本芳翠の青年時代の一時期を取り上げている。 ・西洋画と出会い、絵を描きたいという強い思いをもちながらも、絵を描くこととは関係のない、つらい丁稚奉公をしなければならない為蔵(山本芳翠)の気持ちに共感することができる。 ・親や家のことを思いながらも夢を追い続けようと決心した為蔵の気持ちに共感することができる。 ・辛い中でも絵を描き続ける努力をし、弟子入りを許されて、新たに努力し続ける決意をした為蔵の素晴らしさに触れ、より高い目標を立て、その具現に向けてくじけないで努力しようとする生き方を捉えることができる。</p>
--	---	--

■ ねらい
思い通りにいなくても、くじけずに目標に向かって努力し続けていくことの大切さに気づき、粘り強く最後までやり抜こうとする心情を育てる。

<p>■ 展開の構想 ・途中で投げ出したくなったり、迷い出したりする人間の弱さに気付かせる。 ・親や家のことを思い悩むが、あきらめずに夢を追いかけたことに気付かせる。 ・弟子入りが許された主人公の気持ちを考えさせる中で、粘り強く最後までやり抜いた気持ちのよさに気付かせる。 ・自分の生活を振り返ることで、自分で決めたことを継続してやり遂げようとする心情を高める。</p>	<p>■ 基本発問 (◎中心発問) ○暗い思いが暗雲のように胸の内いっぱい広がってくる時の為蔵はどんな気持ちだったでしょう。 ○芳柳に弟子入りを許された時の為蔵はどんな気持ちだったでしょう。 ◎自分の目標に向かって努力し続けた為蔵の生き方からどんなことが学べますか。 ○これまでに途中でやめてしまいそうになったけれど、最後までやりとげたことはありますか。</p>
---	---

■ 「私たちの道徳」の活用 (授業前 ・ 授業中 ・ 授業後 ・ 活用しない)
(活用の仕方) 「希望と勇気をもってくじけずに」 (P.18～19) を終末に読んで、自分の夢や目標実現に向けての努力について考える。

2 学習指導過程

	基本発問と予想される児童の反応	指導・援助
導入	<p>◇山本芳翠の経歴を紹介し、資料への興味・関心を高める。</p> <p>○目標に向かって頑張っているとき、皆さんはどんな気持ちですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もうすぐできるかもしれないと思い、わくわくする気持ち。 ・なかなかできないと嫌になってもうやめようかなと思うときがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・山本芳翠は、旧明智町の出身であることや「洋画の父」といわれていることや、時代背景について紹介する。 ・「灯を持つ乙女」の写真を提示する。 ・目標に向かって頑張っているときの前向きな気持ちを思い起こさせる。
展開前段	<p>◇資料提示をし、範読をする。</p> <p>○暗い思いが暗雲のように胸の内いっぱい広がってくるときの為蔵はどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こんなことをして、本当に入門が許されるのだろうか。 ・いっそのことやめてしまおうか。 ・つらい。でも絵の勉強がしたい。少しでも絵がうまくなりたい。 <p>○芳柳に弟子入りを許されたときの為蔵はどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つらい丁稚奉公に耐えたかがあった。 ・これでやっと本格的な勉強ができる。 ・これからが本当の出発だ。もっと努力をしていい絵をたくさん描こう。 <p>◎自分の目標に向かって努力し続けた為蔵の生き方からどんなことが学べますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のやりたいことと違うことをさせられたのに、夢をあきらめないで頑張り通した為蔵はすごい。 ・絵を描くこととは関係のないことでも耐えて続けたから、絵の勉強も続けられて有名な画家になれたと思う。 ・自分だったら途中であきらめたと思うけれど、夢を途中であきらめなかったから、それだけ西洋の絵に強くひかれたと思うし、日本一の絵描きになりたいという強い願いがもてたと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他から強いられた目標ではなく、自ら主体的に求めた目標であることを確認する。 ・西洋の絵画に出会い、その魅力に強く惹かれたことに触れる。 ・絵を描くことと関係のない丁稚奉公をさせられ、途中で投げ出したくなったり、迷い出したりする人間の弱さに気付くことができるようにする。 ・とにかく絵画の勉強をするんだという一方的な目標の強さだけでなく、親や家のことを思い悩みながらも、あきらめずに夢を追いかけたことに気付くことができるようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【深めの発問】</p> <p>★為蔵はどうして丁稚奉公を続けながら、絵の修行も続けることができたのだろうか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・為蔵の生き方を肯定し、絵を描くこととは関係のないことをやらされてもあきらめなかったという心の支えを確認する。
展開後段	<p>○これまでに途中でやめてしまいそうになったけれど、最後までやりとげたことはありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏休みの自主研究で、途中で怠けそうになったけれど、毎日休まずに続けてできたので、自分に自信ができた。 ・幼い頃からピアノを習ってきて、練習をしたくなかったり、レッスンに行きたくなかったりして、何回もやめようと思ったことがある。しかし、今思うと難しい曲が弾けるようになったり、発表会で拍手をもらったので頑張ってきてよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・希望、勇気、努力という気付かせたい価値の視点から今後の自分を考え、実践への意欲を高める。 ・行為のみではなく、そのときの気持ちや、今思っていることについても語るができるようにする。
終末	<p>◇「私たちの道徳」の「希望と勇気をもってくじけずに」(P. 18～19)に掲載された人物のコメントを読む。</p>	<p>＜変容の見届け＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「思い通りにならないこともあるが、あきらめずに努力し続けることで目標が達成できるのだ。やり遂げたいという思いを強くもって最後まで続けられるようになりたい」など、目標に向かって粘り強くやり遂げようとする思いをもっている。

3 道徳の時間（本時）と他の教育活動との関連

＜場の内容・ねらい＞

＜児童の意識＞

＜指導・援助＞

【学級活動】（6月）
「係活動の見直し」
 ・4月から取り組んできた中で、学級目標や係活動の目標についての実現状況を振り返り、今後の方向について話し合うことができる。
 ・係活動等、仲間と自主的・自発的に取り組むことで目標を実現する具体的な姿はどうであったかを話し合うことができる。

体育（6月～7月）
「水泳」
 ・クロールや平泳ぎで続けて長く泳ぐことができる。
 ・自分の目標をやりとげることができる。

道徳の時間（7月）
「灯を持つ乙女—山本 芳翠」
内容項目 1-(2)
 ・思い通りにいかなくても、くじけずに目標に向かって努力し続けることの大切さに気付き、粘り強く最後までやり抜こうとする心情を育てる。

学級活動（7月）
「夏休みの計画を立てよう」
 ・昨年度の夏休みの反省を生かし、継続して取り組むことができる夏休みの計画を立てることができる。

【日常の活動】
○係活動・委員会活動
 ・「学級・学年をさらによくしたい」という願いをもって、自分の仕事に継続して取り組むことができる。

○帰りの会
 ・仲間の気持ちを考え、希望をもって取組を充実させている児童を位置付け、充実感や満足感を感得する。

○家庭学習
 ・毎日こつこつと家庭学習に取り組むことができる。

・最高学年だから、全校のリーダーとして頑張っていていきたい。
 ・学級目標に向かって、みんなと一緒に努力することを忘れていた。目標をもち、みんなと力を合わせていくことが大切だ。

・今年は、自分の苦手な泳法にも意欲的に取り組もう。そのために、頑張ってお練習する。
 ・仲間の助言を聞いてこつをつかんで、できるようになるまで頑張る。

・自分が立てた目標が達成できないと、すぐにあきらめてしまう。
 ・目標に向かって最後まで努力し続けると気持ちがいいことが分かった。

・いよいよ夏休み。自分が立てた計画をしっかりと守れるようにしよう。
 ・小学校生活最後の夏休みだから、最後までやりきれるように頑張る。

・学校や学級のリーダーとして、自主的・自発的に行動し、最後までやりとげた喜びを交流し、活動に対する意欲を高める。

・個人カードを作成し、毎時間の達成が分かるようにする。また、目標が達成できるように助言する。
 ・あきらめずに最後まで取り組む姿を価値付ける。

・誰にでも途中であきらめなくなる弱さはあるが、そんな自分を見つめ直し、目標に向かって努力し続け、最後までやり抜くことの大切さに気付かせる。

・無理な計画にならないように助言する。
 ・夏休みの計画を保護者とともに考えるようにし、家庭でも継続して取り組むことができるよう助言していただくように働きかける。

ともしび
灯を持つ乙女——山本 芳翠



ともしび おとめ
「灯を持つ乙女」

ほうすい
芳翠は、明治十一年（一八七八年）、フランス国立美術学校に留学し、九年間油絵を学びました。

上の絵は、「洋画の父」といわれる山本芳翠の代表作です。ろうそくのあわい光の中にかび出る、まなざしのやさしい明治の乙女

のすがたが、見る人の心をゆさぶります。この絵は現在、彼が生まれた明智町の山本家にあり、日本美術史に残る名画の一つであるといわれています。

まだ、明けきらぬ冬の朝、旅すがたに身を固めた為蔵少年（芳翠の本名、当時十五才）は、村ざかいの滝坂峠に立ちました。

「おとう、おかあ、しばらくの親不孝をお許しください、おれはどうしても、絵の勉強がしたいのです。」

まだ、家で何も知らずにねむっているであろう父母に向かって、しばらく手を合わせたのち、彼は足ばやに村を出て行きました。

「日本一の絵かきになるんだ。」と、ちかった彼は、京都で日本画の修行にはげんでいましたが、明治四年（一八七一年）、本格的に絵を学ぶため、中国へわたろうとして、横浜港へ行きました。町を歩いていた彼は、とある店先で、今まで見たことのないふしぎな絵に出会って、思わず足をとめました。聞けば、西洋から来たものであるとのことでした。

「これが西洋の絵か。油に絵の具をとかしてかくというが……。うーん、

力強くて生命を感じる絵だ。」

彼は、何時間もその絵の前に立ちつくしていました。その夜、宿へ帰っても、その絵が目の前にちらついてねむれませんでした。次の日もその次の日も、その絵を見に行きました。

「絵は、ただのかざり物ではない。作者の命の表れたものだ。あの西洋の絵には、それがある。あんな絵をかきたいものだ。よし、油絵をやろう。最初から勉強のやり直しだ。」

こう決心すると、為蔵は中国行きをやめ、横浜の洋画家、五姓田芳柳ごせだほうりゅうに弟子入りを願いました。しかし、五度もことわられました。

「おいつ、為蔵ためぞうとやら、それほどまでに言うのなら、これから半年、あの上州屋じょうしゅうやで丁稚奉公ていぢほうこうをしてから出直してこい。」

六度目に願い出たとき、根負けした芳柳ほうりゅうは為蔵ためぞうにそう言いました。

上州屋じょうしゅうやとは近くの表具屋ぐぐやで、親方は、人使いのあらいことで有名でした。上州屋の丁稚ていぢとなった為蔵ためぞうは、朝、暗いうちから、掃除そうじ、洗たく、使い走り、兄弟子あいでしの世話にと身を粉にして働きました。しかし、絵の修行しゆぎょうは、かた時も忘れませんでした。毎夜、人のね静まったところ、ろうそくの灯の下で絵筆を走らせました。仲間のね顔を何十枚もかきました。昼間、使いに出たときに見た、港の景色けしきを思い出してかきました。紙さえ十分に手に入らなかったので、菓子や反物たんものの包み紙を人に分けてもらって画帳としました。

修行しゆぎょうはつらいものと覚悟かくごしていましたが、それでも、時としては暗い思いが暗雲のように胸の内いっぱいに広がってくるのを、どうすることもできないことがありました。

「わたしは、こんな所で何をしているのだろう、何とかして、絵かきになりたい。はたして、入門を許してもらえるものだろうか。」

そう思いながらも、目にうかぶのは、あの店先で出会った油絵です。

「あの絵に、自分のたましいがすいこまれていくようだった。あの絵に、学ば

なければならぬものが、いっぱいある。」

と思い、為蔵ためぞうは夜の明けるのを待ちかねたようにして、また、その絵を見に行くのでした。

こうして、半年が過ぎて行きました。為蔵ためぞうは、

思いきって、自作の絵一枚と入門願あらいわいを持って、再び、五姓ごせい田芳柳ほうりゅうの前にすがたを現あらわしました。

「うーむ。お前まへというやつは……。」

芳柳ほうりゅうは、その絵を見てひそかに舌したをまくとと

もに、為蔵ためぞうのねばり強たけさに関心かんしんをして入門にゅうもんを許ゆる

し、「芳翠ほうすい」の名前なまえをあたまました。

「これからだ。日本一の絵かきになる道は、まだまだ遠いぞ。」

入門にゅうもんを許ゆるされた芳翠ほうすいは、いっそう努力どりょくすることを決意けつぎし、常に、自分に言い聞かせながら、絵えの修行しゆぎやうを続けるのでした。

洋画家山本芳翠ほうすいとしての出発しゅつぱつは、明治五年（一八七二）、彼が二十二才のときでした。

内容項目 一―(二)

出典 岐阜県教育委員会 郷土の道徳「灯を持つ乙女」

(昭和六十一年七月)

